

〔日〕川端康成 著

雪国

ゆきぐに



408433

H 312 6
C 90

日语注释读物

雪 国

〔日〕川端康成 著

尚永清 译解



商务印书馆

1997·北京

图书在版编目(CIP)数据

雪国/(日)川端康成著. - 北京:商务印书馆, 1997
(日语注释读物)
ISBN 7-100-01941-9

I. 雪… II. 川… III. 日语-语言教学-语言读物
IV. H 369.4

中国版本图书馆 CIP 数据核字(95)第 09180 号



[日]川端康成 著

尚永清 译解

商务印书馆出版

(北京王府井大街 36 号 邮政编码 100710)

新华书店总店北京发行所发行

河北省香河县第二印刷厂印刷

ISBN 7-100-01941-9/H·563

1997 年 10 月第 1 版

开本 787×1092 1/32

1997 年 10 月北京第 1 次印刷

字数 240 千

印数 3 000 册

印张 11 1/4

定价:13.40 元

前 言

《雪国》是一篇文字优美，情节动人的悲剧故事。它的作者川端康成(1899~1972)属于日本大正末年兴起的新感觉派的作家。《雪国》在1937年开始陆续刊登在这一派的杂志《文学界》上。这部小说以日本东北地方降雪量最大，号称雪国的地方为背景，通过一个不务正业的男子岛村同一个出入在雪国温泉旅馆的艺妓驹子和另外一个美少女叶子这三人之间的心理纠葛而细腻生动地描写人生宿命的悲惨结局。这部小说全篇完成于1948年。1968年《雪国》和川端的另外两篇小说：《古都》、《千只鹤》一并获得诺贝尔文学奖。

所谓新感觉派是在日本大正末年与日本的普罗文学运动同时诞生的文学流派，属于这一派的作家还有知名的横光利一、片冈铁兵、中河与一等人。这一流派深受第一次世界大战后在西方兴起的艺术运动——未来派、表现派等的影响，是在美国机械主义压力下兴起并试图打破旧传统的一个文学运动。同时也是针对当时流行的所谓“私小说”(以作者本人的生活素材为主题的小说)的一个挑战。

新感觉派在形式上注重优美的风格和新颖的笔调。它试图从感觉上描写事物，因而它也带有一种象征主义的味道。《雪国》的开篇头两句就可以算作最好的例子：

“国境の長いトンネルを抜けると、雪国であった。夜の底が白くなった。”

第一句的“名词+であつた。”和第二句的“形容词连用形+なつた。”都是从感觉上发现事物的已经实现和变化的。其中第二句的「夜の底」是一个新奇的词组。这个“夜的底部”从字面看,无论日语还是汉语都是不好理解的。其实,它想表达的是:在列车上观看车外的景物时,车窗就是一幅风景画,而它的底部当然是指大地而言了。因此这个句子就是说“大地变成了白色。”而言外之意,列车开入隧道之前的大地,没有雪因而是黑的,而列车穿过隧道一进入雪国,大地便是白雪皑皑了。这就是新感觉派的一种手法。总的说来,《雪国》对大自然的描写是优美的;人物的心理描述是细腻出色的。读者在阅读中自然会体会到这一点。

本书出版的目的是为日语专业高年级学员和同等学力上的同志提供一个直接阅读名著原文的辅导读物。在本书的注释部分对于一些较难的语法问题以及风俗习惯上难于理解的词句,都作了较为详细的解说。当然,限于译注者的水平,缺点和挂漏在所难免。深望广大读者和专家不吝金玉给以指正。

尚永清

1996年5月

国境^{くにさかい}の長いトンネルを抜けると雪国であった①。夜
の底^{そこ}が白くなった。信号所に汽車が止まった。

向側^{むかいがわ}の座席から娘^{むすめ}が立って来て、島村^{しまむら}の前のガラ
ス窓^{おと}を落した。雪の冷氣^{れいき}が流れこんだ。娘は窓^{なが}いっば
いに乗り出して、遠くへ叫ぶように

「駅長^{えきちやう}さん、駅長さん。」

明^{あか}りをさげてゆっくり雪を踏んで来た男は、襟巻^{えりまき}で鼻
の上まで包^{つつ}み、耳に帽子^{けがわ}の毛皮^たを垂れていた。

もうそんな寒さかと島村^{しまむら}は外を眺めると、鉄道の官舎
らしいバラックが山裾^{やますそ}に寒寒^{さむさむ}と散らばっているだけで、
雪の色はそこまで行かぬうちに闇^{やみ}に呑まれていた②。

「駅長^{えきげん}さん、私です、御機嫌よろしゅうございます。」

「ああ、葉子^{ようこ}さんじゃないか、お帰りかい。また寒くな
ったよ。」

「弟が今度こちらに勤め^{つと}させていただいておりますの
ですってね。お世話^{せわ}さまですわ。」

「こんなところ、今に^{さび}寂しくて^{まい}参るだろうよ。^{わか}若いのに^{かわいそう}可哀想だな。」

「ほんの子供ですから、駅長さんからよく^{おし}教えてやって
いただいて、よろしく^{ねが}お願いいたしますわ③。」

「よろしい。元気で^{はたら}働いてるよ。これからいそがしく
なる。去年は大雪だったよ。よく^{なだ}雪崩れてね、汽車が
^{たちおうじょう}立往生するんで、^{むら}村も^{なきた}焚出しがいそがしかったよ。」

「駅長さんずいぶん^{あつ}厚着に見えますわ。弟の手紙に
は、まだチョッキも着ていないようなことを書いてあり
ましたけれど。」

「私は着物を^{よんまいかき}四枚重ねだ。若い者は寒いと酒ばかり飲
んでいるよ。それでごろごろあすこに^{たお}ぶっ倒れてるの
さ、^{かぜ}風邪をひいてね④。」

駅長は官舎の方へ手の明りを振り向けた。

「弟もお酒をいただきますでしょうか。」

「いや。」

「駅長さんもうお歸りですか?」

「私は^{けが}怪我をして、^{かよ}医者に通ってるんだ。」

「まあ、いけませんわ。」

^{わふく}和服に^{たちばなし}外套の駅長は寒い立話をさっさと切り上げた

いらしく、もう後姿^{うしろすがた}を見せながら、

「それじゃまあ大事^{だいじ}にいらっしゃい。」

「駅長さん、弟は今^{いま}出ておりませんか?」と、葉子は雪の上^{めきが}を目捜しして、

「駅長さん、弟をよく見てやって、お願いします⑤。」

悲しいほど美しい声であつた。高い響^{ひび}きのまま夜の雪から木魂^{こだま}して来^きそうだった⑥。

汽車が動き出しても、彼女は窓から胸を入れなかった。

そうして線路の下を歩いている駅長^おに追いつくと、

「駅長さあん、今度の休みの日に家へお歸りって、弟に言^{くだ}ってやって下さあい。」

「はあい。」

葉子は窓をしめて、赤らんだ頬^{ほお}に両手^{りょうて}をあてた。

ラッセルを三台^{そな}備えて雪を待^まつ、国境の山であつた。トンネルの南北から、電力による雪崩^{なだれ}報知線^{ほうちせん}が通じた。除雪^{じよせつ}人夫^{にんぶ}延人員五千名に加えて消防組青年団の延人員二千名の出動の手配^{てはい}がもう整^{ととの}っていた。

そのような、やがて雪に埋^{うずも}れる鉄道信号所に、葉子という娘の弟がこの冬から勤めているのだと分^わかると、島村は一層彼女に興^{きよう}味^みを強めた⑦。

しかし、ここで「娘」と言うのは、島村にそう見えたからであって、連れ^つれの男が彼女のなんであるか、無論^{むろん}島村の知るはずはなかった。二人のしぐさは夫婦じみていたけれども、男は明^{あき}らかに病人^{びいん}だった。病人^{びいん}相手^{あいて}ではつい男女の隔^{へだ}てがゆるみ、まめまめしく世話すればするほど、夫婦じみて見えるものだ。実際また自分より年上^{としうえ}の男をいたわる女の幼^{おさ}ない母^{はは}ぶりは、遠目^{とおめ}に夫婦とも思われよう⑧。

島村は彼女一人だけを切り離^{きりはな}して、その姿の感じから、自分勝手に娘だろうときめているだけのことだった。でもそれには、彼がその娘を不思議^{ふしぎ}な見方^{みかた}であまりに見つめ過ぎた結果、彼自らの感傷^{かんしやう}が多分^{たぶん}に加^{くわ}わってのことかも知れない⑨。

もう三時間も前のこと、島村は退屈^{たいくつ}まぎれに左手^{ひだりて}の人差指^{さしゆび}をいろいろに動かして眺めては、結局この指だけが、これから会^あいに行く女をなまなましく覺^{おぼ}えている、はっきり思い出そうとあせればあせるほど、つかみどころなくぼやけていく記憶^{きおく}の頼^{たの}りなきのうちに、この指だけは女の触^{しょつ}感^{かん}で今も濡^ぬれていて、自分を遠く^ひの女へ引き寄^よせるかのようだと、不思議に思いながら、鼻につけて

匂いを嗅いでみたりしていたが、ふとその指で窓ガラスに線を引くと、そこに女の片眼がはっきり浮き出たのだった⑩。彼は驚いて声をあげそうになった。しかしそれは彼が心を遠くへやっていたからのことで、気がついてみればなんでもない⑪、向側の座席の女が写ったのだった。外は夕闇がおりているし、汽車のなかは明りがついている。それで窓ガラスが鏡になる。けれども、チームの温みでガラスがすっかり水蒸気に濡れているから、指で拭くまでその鏡はなかったのだった。

娘の片眼だけは反って異様に美しかったものの、島村は顔を窓に寄せると、夕景色見たさという風な旅愁顔を俄かづくりして、掌でガラスをこすった。

娘は胸をこころもち傾けて、前に横たわった男を一心に見下していた。肩に力が入っているところから、少しいかつい眼も瞬きさえしないほどの真剣さのしるしだと知れた⑫。男は窓の方を枕にして、娘の横へ折り曲げた足をあげていた。三等車である。島村の真横ではなく、一つ前の向側の座席だったから、横寝している男の顔は耳のあたりまでしか鏡に写らなかった。

娘は島村とちょうど斜めに向い合っていることになるので、じかにだっで見られるのだが、彼女等が汽車に乗り込んだ時、なにか涼しく刺すような娘の美しさに驚いて目を伏せる途端^⑬、娘の手を固くつかんだ男の青黄色い手が見えたものだから、島村は二度とそっちを向いては悪いような気がしていたのだった。

鏡の中の男の顔色は、ただもう娘の胸のあたりを見ているゆえに安らかだという風に落ちついていて、弱い体力が弱いながらに甘い調和を漂わせていた^⑭。襟巻を枕に敷き、それを鼻の下にひっかけて口をぴたり覆い、それからまた上になった頬を包んで、一種の頬かむりのような工合だが、ゆるんで来たり、鼻にかぶさって来たりする。男が目を動かすか動かさぬうちに、娘はやさしい手つきで直してやっていた^⑮。見ている島村がいらだって来るほど幾度もその同じことを、二人は無心に繰り返していた。また、男の足をつつんだ外套の裾が時々開いて垂れ下る。それも娘は直ぐ気がついて直してやっていた。これがまことに自然であった。このようにして距離というものを忘れながら、二人は果てしなく

遠くへ行くものの姿のように思われたほどだった⑩。
それゆえ島村は悲しみを見ているというつらさはなく
て、夢のからくりを眺めているような思いだった。不思議な鏡のなかのことだったからでもあろう。

鏡の底には夕景色が流れていて、つまり写るものと写す鏡とが、映画の二重写しのように動くのだった。登場人物と背景とはなんのかかわりもないのだった。しかも人物は透明のはかなさで、風景は夕闇のおぼろな流れで、その二つが融け合いながらこの世ならぬ象徴の世界を描いていた⑪。殊に娘の顔のただなかに野山のとし火がともった時には、島村はなんともいえぬ美しさに胸が震えたほどだった。

遙かの山の空はまだ夕焼けの名残の色がほのかだったから、窓ガラス越しに見る風景は遠くの方までものかたちが消えてはいなかった。しかし色はもう失われてしまっていて、どこまで行っても平凡な野山の姿が尚更平凡に見え、なにものも際立って注意を惹きようがないゆえに、反ってなにかぼうっと大きい感情の流れであった。無論それは娘の顔をそのなかに浮べていたからで

ある。姿^{すがた}が写る部分だけは窓の外が見えないけれども、娘の輪郭^{りんかく}のまわりを絶えず夕景色が動いているので、娘の顔も透明のように感じ^{かん}られた。しかしほんとうに透明かどうかは、顔の裏^{うら}を流れてやまぬ夕景色が顔の表^{おもて}を通^{とお}るかのように錯覚^{さつかく}されて、見極^{みきわ}める時がつかめないのだった^⑬。

汽車のなかもさほど明^{あか}るくはなし、普通の鏡のように強くはなかった^⑭。反射^{はんしや}がなかった。だから、島村は見入^いっているうちに、鏡のあることをだんだん忘れてしま^いって、夕景色の流れのなかに娘が浮^{うか}んでいるように思われて来た。

そういう時彼女の顔のなかにともし火がともったのだった。この鏡の映像は窓の外のともし火を消す強さはなかった。ともし火も映像を消^けしはしなかった。そうしてともし火は彼女の顔のなかを流れて通^{とお}るのだった。しかし彼女の顔を光^{ひか}り輝^{かがや}かせるようなことはしなかった。冷たく遠い光であつた。小さな瞳^{ひとみ}のまわりをぼう々と明^{あか}るくしながら、つまり娘の眼と火とが重^{かさ}なつた瞬間^{しゆんかん}、彼女の眼は夕蘭^{ゆうらん}の波間^{なみま}に浮^{うか}ぶ、妖^{あや}しく美しい夜光虫^{やこうちゅう}であつた^⑮。

こんな風に見られていることを、葉子は気づくはずがなかった。彼女はただ病人に心を奪^{うば}われていたが、たとえ島村の方へ振り向いたところで、窓ガラスに写る自分の姿は見え、窓の外を眺める男など目にも止まらなかっただろう。

島村が葉子を長い間盗^{ぬすみ}見しながら、彼女に悪いということをおぼえていたのは、夕景色の鏡の非現実な力にとらえられていたからだろう②。

だから彼女が駅長に呼びかけて、ここでもなにか真剣^{しんけん}過ぎるものを見せた時にも、物語^{ものがたり}めいた興味が先に立^たったのかも知れない③。

その信号所を通るころは、もう窓はただ闇^{やみ}であった。向うに景色の流れが消えると、鏡の魅力^{みりょく}も失^{うしな}われてしまった。葉子の美しい顔はやはり写っていたけれども、その温^{あたた}かいしぐさにかかわらず、島村は彼女のうちになにか澄^すんだ冷^{つめ}たさを新^{あた}しく見つけて、鏡の曇^{くも}って来るのを拭^{ぬぐ}おうともしなかった④。

ところがそれから半時間ばかり後に、葉子達^{たち}も思いがけなく島村と同じ駅に下りたので、彼はまたなにか起こるか自分にかかわりがあるかのように振り返ったが、

プラット・フォームの寒さに触れると、急に汽車のなかの非礼が恥ずかしくなって、後も見ずに機関車の前を渡った④。

男が葉子の肩につかまって線路へ下りようとした時に、こちらから駅員が手を上げて止めた。

やがて聞から現われて来た長い貨物列車が二人の姿を隠した。

宿屋の客引きの番頭はちやうど火事場の消防のやうにもものものしい雪装束だった⑤。耳をつつみ、ゴムの長靴をはいてゐた。待合室の窓から線路の方を眺めて立ってゐる女も、青いマントを着て、その頭巾をかぶってゐた。

島村は汽車のなかのぬくみがきめなくて、そとのほんとうの寒さをまだ感じなかったけれども、雪国の冬は初めてだから、土地の人のいでたちに先づおびやかされた。

「そんな恰好をするほど寒いのかね。」

「へい、もうすっかり冬支度です。雪の後でお天気になる前の晩は、特別冷えます。今夜はこれでもう氷點を下ってをりますでせうね。」

「これが氷點以下かね。」と、島村は軒端の可愛い氷柱

を眺めながら、宿の番頭と自動車に乗った。雪の色が家々の低い屋根を一層低く見せて、村はしいんと底に沈んでゐるやうだった。

「なるほどなににさはっても冷たさがちがふよ。」

「去年は氷點下二十何度といふのが一番でした。」

「雪は？」

「さあ、普通七八尺ですけど、多い時は一丈を二三尺超えてますでせうね。」

「これからだね。」

「これからですよ。この雪はこの間一尺ばかり降ったのが、だいふ解けて来たところです。」

「解けることもあるのかね。」

「もういつ大雪になるか分かりません。」

十二月の初めであった。

島村はしつつこい風邪心地でつまつてゐる鼻が、頭のしんまですつといわどきに通つて、よこれものが洗ひ落されるやうに、氷漬がしきりと落ちて来た。

「お師匠さんとこの娘はまだゐるかい。」

「へえ、をりますをります。驛にをりましたが、御覧になりませんでしたか、濃い青いマントを着て。」

「あれがさうだったの？——後で呼べるだらう。」

「今夜ですか。」

「今夜だ。」

「今の終列車^{しゅうれつしや}でお師匠^{ししやう}さんの息子が歸るとか言って、
迎へに出てゐましたよ。」

夕景色^{ゆふげしき}の鏡のなかで葉子^{はこ}にいたはられてゐた病人は、
島村^{あゐ}が會ひに来た女の家の息子^こだったのだ⑤。

さうと知ると、自分の胸のなかをなにかが通り過ぎた
やうに感じたけれども、このめぐりあはせを、彼はさほど
不思議と思ふことはなかった。不思議と思はぬ自分を不
思議と思つたくらゐのものであつた。

指で覚えてゐる女と眼にともし火をつけてゐた女との
間に、なにがあるのかなにが起る^{おき}のか、島村はなぜかそ
れが心のどこかで見えるやうな氣持^{きもち}もする。まだ夕景
色の鏡から醒め切らぬせゐだらうか。あの夕景色の流れ
は、さては時の流れの象徴であつたかと、彼はふとそんな
ことを呟^{つぶや}いた⑥。

スキイの季節^{きせつ}前の温泉宿^{やど}は最も客の少い^{すくな}時で、島村
が内湯^{うちゆ}から上^{あが}つて来ると、もう全く寢静^{ねしず}まつてゐた。古
びた廊下^{ろうか}は彼の踏む^ふ度にガラス戸^{たび}を微かに鳴らした。
その長いはずれの帳場^{ちやうば}の曲り角^{まが}に、裾^{すそ}を冷え冷えと黒^{くろ}